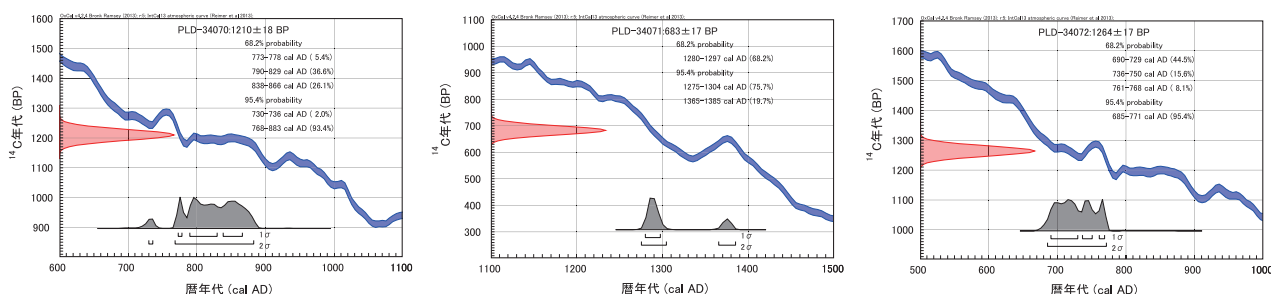


紀後半～8世紀後半で、飛鳥～奈良時代に相当する。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Lanting, J. N., Aerts-Bijma, A. T. and van der Plicht (2001) Dating of Cremated Bones. Radiocarbon, 43(2A), 249-254.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich,

- M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughes, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.
- 吉田邦夫 (2012) 古食性分析<縄文人の食卓>. アルケオメトリア, 43-55, 東京大学総合研究博物館.



第 24 図 暦年較正結果

第 2 節 観音堂出土人骨

中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

観音堂は、南相馬市小高区泉沢に所在する。観音堂の石仏は、近くの薬師堂と阿弥陀堂の石仏と合わせて大悲山の石仏と呼ばれている。観音堂では、倒壊した建物の修理に伴う発掘調査で人骨が出土した。ここでは、人骨の部位同定と観察結果を報告する。

(2) 試料と方法

試料は、遺構から検出された人骨 9 点である。標本との比較により部位を同定し、肉眼での観察所見を記した。

(3) 結果と考察

人骨は全て破片化しており、最も大きい骨片でも 3 cm 程度であった。色調はやや黄色がかった白色の部分が多く、一部は黒色～灰色であった。骨片の表面に縦横や亀甲状に亀裂が走る骨片も見られた。

焼骨の色調は、焼成温度に左右され、500 度前後で黒色、600 度から 900 度は灰色から白色、900 度以上では白色や淡黄色となるとされる (Brothwell, 1981; Buikstra and Ubelaker, 1994; Krogman and Iscan, 1986)。色調

がばらついているため、部分によって、受けた熱に温度の高低はあったと考えられるが、最も高温に晒された部分では、900 度以上の熱を受けたと考えられる。また、白骨化した骨では生じにくい、焼かれた際の収縮に伴う亀裂が見られる点から、焼かれた時点では、肉などの軟質部が付着したままであったと考えられる。

確認できた部位ごとの点数は、頭蓋骨破片 4 点、上腕骨あるいは大腿骨の骨頭破片 (左右不明) 1 点、四肢骨破片 (左右不明) 3 点、部位不明破片 1 点である。小片になってしまっている点を考慮しても人骨一体分には満たないため、一体分ではなく一部が遺構内に埋まっていたと考えられる。

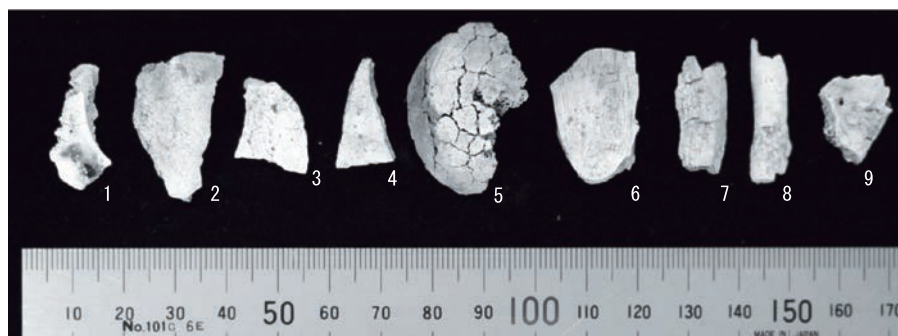
頭蓋骨破片のうち、1 点には縫合部分が残されていた。縫合部分は癒合していないため、それほど老年には達していない可能性がある。

性別が判断できる部位は確認できなかった。

参考文献

- Brothwell, D. R. (1981) Digging up Bones. 208p. British Museum (Natural History).
- Buikstra, J. E. and Ubelaker, D. H. (1994) Standards for Data

Collection from Human Skeletal Remains. 206p. Arkansas Archeological Survey.
Krogman, W. M. and Iscan, M. Y. (1986) The Human Skeleton in Forensic Medicine. 551p. C.C. Thomas.



第25図 観音堂から出土した人骨

1-4.頭蓋骨 5.上腕骨あるいは大腿骨 6-8.四肢骨 9.部位不明

第3節 観音堂出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

南相馬市小高区泉沢に所在する観音堂の発掘調査で出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同じ試料で放射性炭素年代測定も行っている。

（2）試料と方法

試料は、D区南北サブトレの0d層から出土した炭化材1点（遺物番号：KND 炭化材）である。樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

（3）結果

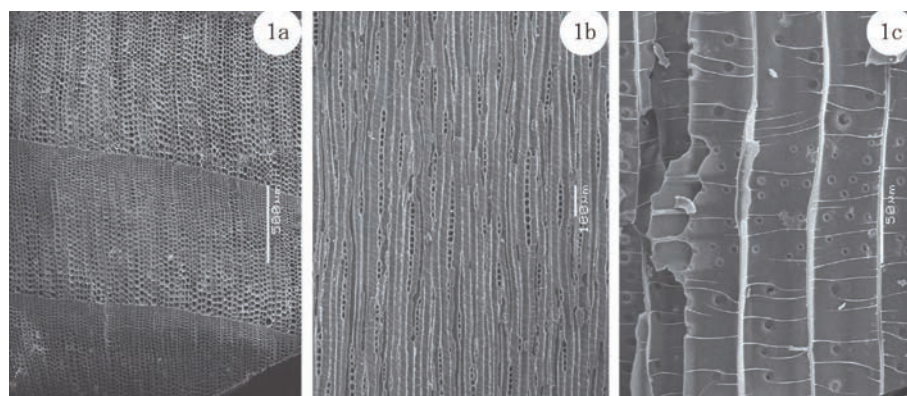
同定の結果、針葉樹のカヤ1分類群であった。

次に、同定された材の特徴を記載し、第26図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1)カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 第26図 1a-1c(No.1)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1～5細胞高である。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1分野に2～4個みられる。また、仮道管の内壁には2本1対のらせん肥厚がみられる。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。



第26図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. カヤ(No. 1)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面